

音楽による国際交流と大学の役割

新井友梨 (教育学研究科)

堀内伊吹 (芸術表現講座)

1. はじめに

音楽による国際交流とは何だろうか。本論は、長崎大学教育学部音楽専攻が、中国、韓国の大学と行ってきた音楽交流事業を報告し、検証を試み、その意味を考える。その上で、現代の社会的状況も踏まえた、大学による文化的国際交流の展望を図ろうと考えている。

本論に入る前に、いくつか、前提的な議論を考えてみたい。

まず、音楽による国際交流とは一般的に、非言語的であるところに特徴づけられてきたと思う。確かに、音楽の「響き」そのものの受け手としては、それらを体感する中で、感動等様々な内面的な活性を行っている。しかし一方で、音楽を創造する、或いは音楽を響きへと具現化する立場においては、音楽とは同時に非常に言語的であるともいえる。なぜなら、音楽とは多くの場合、特定の空気振動に抽象化された思考活動でもあるからだ。特に西洋芸術音楽(＝一般的にいうクラシック音楽)をベースに考える場合、作曲という行為は、その人の理念が表現技法と等しい関係を結び、演奏という現象化は、その音符のコンテキストを読み解き現実化するプロセスであるだろう。音楽による交流の強みとは、実はその両義性にあるのではないかと考える。

本論での「音楽による国際交流」の基礎になるのは、音楽の中でも西洋芸術音楽というグローバル・スタンダードである。そこに、地域や民族単位の音楽文化が加わるスタンスをとる。なぜなら、前者は記譜法の開発等を通し、作品の普及が前提とされたことに対し、後者は、口伝など、限定的な地域や民族集団内での可変的な持続と伝播の中に存在してきたからだ。現在その継承・保存には、学問的に発展した西洋記譜法による採譜という形が欠かせない要素となっている。そのために、学術的に深まりある国際交流を目指すには、西洋芸術音楽という音楽上の共通言語が必要であるという前提に立っている。

こうした音楽による東アジアでの国際交流は、それ自体が西洋文化という壮大な文化的蓄積を抱え、そこに関わる個々の内に、また自らの文化が存在しているという点で、ごく複合的なものである。長きにわたり、ヨーロッパ諸国を中心に育まれてきた芸術を、今、東アジアという異なる文化的背景をもつ人々が学び、表現し、可能性を追求する。そして、東アジア域内で、同様の背景をもつ学生や教員が、文化・学術的發展を目指し、集う。

これが、本論で議論の対象とする長崎大学教育学部音楽専攻と、中国・韓国の大学間での国際交流の基本スタンスとなる。

2. 実績

音楽専攻では、これまで大きくは2つの国際交流事業を継続してきた。ひとつは、韓国・慶北大学校芸術大学との「日韓音楽交流会」(1990～)、もうひとつは、中国、韓国の大学と合同で5年にわたり開催してきた「国際学生交流フォーラム」(2006～)である。

● 「日韓音楽交流会」

教育学部では、「国際交流の推進は、まず隣国から始めるべき」との理念の下で、韓国・中国の大学と学術交流協定を結び、交流を重ねてきた。日韓音楽交流会は1990年より、長崎大学と慶北大学校芸術大学が互いに開催地を移しながら、20年にわたり実施してきている。当初は両校教員による演奏会と公開レッスン、シンポジウムがメインであったが、1993年の4回目以降、両校学生による演奏会が加わった。3年に一度のインターバルをはさみ、通例3日間の日程で、毎回両校の20名程度の学生が開催地の学生宅

にホームステイし、文化を肌で感じながら、最終日の成果発表演奏会に向けて準備を進める。専門についての議論を深めつつ、様々な刺激の多い環境で本番をこなすことは、毎回、非常に音楽的及び精神的にタフな作業を経験できる貴重な機会である。

今年度2010年は、交流が20年にわたることを記念し、日本学生支援機構による共催支援を受け、10日間に及ぶプログラム「国際大学交流セミナー2010 日韓学生が一緒に作り上げる交流20周年記念音楽祭」を長崎大学で開催した。慶北大学校芸術大学からは、12名の学生と教員3名、ホスト側である長崎大学では、音楽専攻学生全70名と教員9名の参加となった。

プログラム概要は、以下の通りである。

講義（各120分） ：一般公開	「韓・日教授によるピアノ公開レッスン」 「両国における音楽理論の教育事情について」 「沈松鶴&宮下茂 声楽公開レッスン」 「両大学教員によるアンサンブル演奏法講義」（非公開）
ながさき文化 体験ツアー①～④	長崎歴史文化博物館、長崎県美術館（常設展示：須磨コレクション、エル・グレゴ『聖母戴冠』）、神楽、マダム・バタフライゆかりの長崎グラバー園を見学。長崎の歴史文化および日本の伝統音楽に触れた。
アンサンブル演習 ①～④	日韓混合アンサンブルによる、2台ピアノ作品及び声楽・器楽デュオ作品等を演習。学生自らが主体的に意見交換し、音楽づくりを行った。
学生ホームステイ	開催地の一般家庭との交流として、交流開始後5日目に、学生は音楽専攻学生の家ホームステイ。夕食、朝食を家族とともに、日本の生活文化を肌で体験した。
第16回日韓音楽交流会 （国際交流セミナー成果発表演奏会） ：一般公開	学生の成果発表演奏会及び教員の交流演奏会を、長崎ブリックホール国際会議場にて行った。学生演奏会ではアンサンブル演習や公開レッスンの成果を、教員演奏会では教員の作品発表や韓国の民謡等をプログラムに含み、客席はほぼ満員となった。演奏会のPRには両校学生と教員が出演し、2つの放送局からTV放映され、演奏会、そして何よりセミナー全体が、学生たちの中でより社会的な認識の強いものとなった。

● 国際学生交流フォーラム

教育学部の創立130周年記念を機に、音楽専攻と平和・多文化センターが協働で2006年に開始した。本フォーラムは、長崎大学が学術交流協定を結んでいるアジア（現在、韓国・中国）の大学より代表学生と教員を長崎に招き、演奏とスピーチによるコンサートを長崎県美術館エントランスロビーにて開催する。コンサートの特徴は、およそ全てのプログラムにおいて、長崎大学の音楽専攻学生及び教員と来日学生・教員が互いに協演すること。また、各国の伝統的な音楽が様々に紹介され、一般に公開される点がある。

・スピーチと演奏

フォーラムにおいては、これまで講義やシンポジウムを設けることはなかったが、各大学の代表学生が演奏会におけるスピーチでの意見表明を行ってきた。このことは、音楽表現に付して、言葉という、より厳密な表現方法によって、各々の交流へのスタンスを明確化することを示している。正負両面において、歴史的な関係を深く結んできた3者が、今後どのような姿勢・思想をもって、文化的な関係を育んでいくのか、という点について、それぞれの立場から、直接市民にもアピールする機会ができたと考えている。ここには、多国間・多者による国際音楽交流が、長崎の都市的メッセージである「平和」や「多文化共生」に関連する、「前向きな場」として存在した。2006年開始時

の慶北大学校からのメッセージでは、「絶えず変化する国際情勢の中で、多様な文化を持つ国々が、文化交流を通じて相互の理解と親善を深めることが益々重要になりました。(略)外国との文化交流は、自国に対する親近感と肯定的なイメージを育て、諸国との友好関係を築き上げてくれるものと信じています。」との認識が示された。また、2008年初参加の上海師範大学からは、「日中両国の交流の歴史は2千年以上あり、特に文化の交流は途絶えることなく続いてきました。(略)日中両国の先駆者たちは、音楽の理論、思想など色々な面について交流を交わし、お互いに勉強しながらともに進歩するような素晴らしい環境を作り上げました。その時期の日中文化交流は、世界民俗文化交流の手本であったともいえるでしょう(後略)。」と、国内ではともすれば20世紀に限定されがちな双方の歴史的視点への広い認識の喚起と、発展への意欲を受け取っている。

これまでに、韓国からは慶北大学校、漢陽大学校、中国からは北京師範大学(～2007年)、東北師範大学、上海師範大学(2008年～)の5つの大学が継続的に参加している。5年間の概略を以下に掲載する。

2006年3月25日(土) 13:00～15:00 中国・韓国・日本 学生交流フォーラム2006 大陸からの風 一音の調べとおしゃべりと一
主催：長崎大学教育学部(教育学部創立130周年記念事業) 協力：長崎県美術館、社団法人長崎国際観光コンベンション協会 参加大学：韓国…慶北大学校、漢陽大学校 中国…北京師範大学 日本…長崎大学教育学部 主な演奏曲目：ヴァイオリン独奏「スプリング・ソナタ」(L.V.Beethoven)、ソプラノ独唱「忘れなくて」(韓国歌曲)、テノール独唱「さようなら愛の家よ」オペラ《蝶々夫人》より(G.Puccini)、琵琶独奏「十面埋伏」(古曲)、三弦独奏「迎新春」(肖笛声)、オーボエ独奏「Morcean de Salon Op.228」(J.W.Kalliwoda)、全体演奏「花」(滝廉太郎)
2007年3月25日(土) 15:00～17:00 国際交流フォーラム 中国・韓国・日本 大陸からの風 一音の調べとおしゃべりと一Ⅱ
主催：長崎大学教育学部 後援：社団法人長崎国際観光コンベンション協会 協力：長崎県美術館、長崎県文化振興課 参加大学：韓国…慶北大学校、漢陽大学校 中国…北京師範大学、東北師範大学 日本…長崎大学教育学部 主な演奏曲目：ピアノ独奏「ハンガリー狂詩曲第6番」(F.Lizst)、ソプラノ独唱「新アリアン」(金東振)、ホルン独奏「La chsse de saint huberd」(H.Busser)、琵琶独奏「送我一枝玫瑰花」、全体演奏「ふるさと」(作詞:高野辰之、作曲:岡野貞一)
2008年2月24日(日) 15:30～17:30 第3回国際学生交流フォーラム2008 韓国・中国・日本
主催：長崎大学教育学部 助成：草の根国際交流支援事業(財長崎県国際交流協会) 協力：長崎県美術館、社団法人長崎国際観光コンベンション協会 参加大学：韓国…慶北大学校、漢陽大学校 中国…東北師範大学、上海師範大学 日本…長崎大学教育学部 主な演奏曲目：クラリネット独奏「Andante et Allegro pour Clarinete avec accompagnement de Piano」(E.Chausson)、二胡独奏「賽馬」(黄海懷)、木管アンサンブル「風に寄せて」より3楽章(三上次郎)、琵琶独奏「春蚕」(劉徳海)
2009年2月22日(日) 15:00～17:00 第4回国際学生交流フォーラム2009 韓国・中国・日本

<p>主催：長崎大学教育学部 協力：長崎県美術館、社団法人長崎国際観光コンベンション協会 参加大学：韓国…慶北大学校 中国…東北師範大学、上海師範大学 日本…長崎大学教育学部 主な演奏曲目：オーボエ独奏「オーボエとピアノのためのソナタ D-dur Op.116」（サン＝サーンス）、アコーディオン独奏／二重奏：「Mania Mussete」「夢中国」、ソプラノ独奏：「Lungi dal caro bene」（G.サルティ）、「花雲中に」（李興烈）、合唱「～長崎の唄を訪ねて～《春》」より（橋本剛編曲）</p>
<p>2010年2月28日（日）15:00～17:00 第5回国際学生交流フォーラム2010 韓国・中国・日本 ～芸術、国際理解、平和教育で構築する日・中・韓学生交流プログラム～</p>
<p>主催：長崎大学教育学部 協力：長崎県美術館、社団法人長崎国際観光コンベンション協会 参加大学：韓国…慶北大学校、漢陽大学校 中国…上海師範大学、東北師範大学（都合により欠席） 日本…長崎大学教育学部 主な演奏曲目：ピアノ独奏：ソナタNo.5 Op.53（A. Scriabin）、ソプラノ独唱：「今の歌声は」オペラ《セヴィリアの理髪師》より（G.Rossini）、진달래 꽃（金東鎮）、歌とシンセサイザー：「在那遙遠地方」、2台ピアノ：「朧月夜」「夕焼け小焼け」（三善晃編曲）、ピアノとオーケストラのための“抒情的風景”（三上次郎）</p>

3. 成果

「交流」の本質とは、相互理解である。国際交流の成果は、おそらくは数値的に示せるものではなく、またそれによる判断も時には誤解となるかも知れない。ここでは、大学が行う国際交流の目的をまず考えてみたい。

大学の国際交流の目的とは、ひとつに、「学術・研究面での国際的情報共有と発展」が挙げられるだろう。人類にとって、その知的発展が生身の価値と結びついている点を考えると、学問その他人間の知的集積とは、利害を超えて広く世界で共有され、様々な議論を経て一層の発展を図るのが、研究機関の社会的な役割であると考えられる。一方で、大学のタスクから想定されるもうひとつの目的とは、教育機関としての「国際人として次社会を担う人材を創る」という観点＝目的が挙げられるだろう。21世紀以降のインターネットの急速な普及等、認識空間としての世界は急速に狭くなった。移動手段の最速化・利便化もさることながら、クリック一つで海外と繋がることのできる社会において、次世代を担う人材が実社会に出た際に、国際的な視野でものごとを観ることができると否かは、対象の可能性を驚異的なほど左右することになる。こうした時代における国際社会の正しい認識力＝情報リテラシーと発信力をもつ即戦力としての人材育成に、大学の国際交流は大いに貢献するものである。また、地域社会に様々な形で少なからぬ相関関係をもつ地方の総合大学の役割として、一般公開型の国際交流は、新たな論点を提示するだろう。ここに、大学による「地域貢献」という視点を設けたい。この3点を中心にこれまでの音楽交流を検討すると、成果と課題が、よりクリアに見出すことができるのではないだろうか。

● 学術及び研究面での国際的情報共有と発展

元来、西洋芸術音楽という国際性を内包している分野において、国際交流はある種的前提である。ある時代や作品についての新しい発見や、学術的な成果に基づく新たなアプローチの在り方は、ヨーロッパ世界を中心に、世界中で常に議論の対象であり、また、世界各地における新たな作品創造は、周囲に様々な意味や問いといったエネルギーを投げかけている。しかし、西洋芸術音楽の音楽的・学問的本拠地は、おそらくいつまでも地理的にはヨーロッパ大陸にあり、その遺産を受け継ぎ、新たな創造を試みるものは、あくまで「個」の存在として世界各地に存在し、行き来している。

東アジアにおける音楽文化交流とは、また異なる視点をもつ。もちろん、器楽演奏論や室内楽、オペラ或いは歌曲、各種音楽史や音楽理論、美学など、多岐分野における意見交換、音創り・協演を通じた演奏発表、新作発表は、交流の基礎となる構成要素である。しかし、こうした活動を通して同時に担っているのは、西洋と東洋の出会いの地点から、振興度の異なる地域間にネットワークを張り巡らせながら、その地域との関係において音楽の在り方を考え、発展と振興、また教育の在り方を考える場でもあるだろう。

この点における成果としては、各種セミナーやシンポジウムの開催による意見交換は、各国の知見或いは学術的成果の共有化を深めていることが挙げられる。このことは、国際大学セミナー実施アンケートにおいて、学生の47%及び教員の80%が当セミナーを“学術的に”「大変有益であった」としていることから指摘できる。また、同セミナーの感想として、「今後より多くの講義・セミナー等が増え、一層の議論の深まりを望みたい（韓国）」「今回は演奏と音楽学がとり上げられていたが、今後は分野が広がっていても良いと思う。（日本）」といった学生からの意見や、「長期にわたって両校の教員が音楽について、また大学教育について話し合うことができた。」といった教員（韓国）の声等が寄せられたこと。加えて、毎回講義会場一杯となった一般参加の市民の様子も、これまでの手応えと今後への期待が多くの人々に共有されていることを示唆するものだろう。

一方で日韓、日中韓における各国協演をコンセプトとした演奏発表を通じては、リハーサル段階において、演奏者レベルでの様々な意見交換や、レッスン指導が随時存在した。作品の方向性に関する意見のすり合わせ、音創り等を通して、互いの感性やスキルに刺激を受けるとともに、それらを伝える様々な比喻やジョークの中に、互いの生活文化に根ざした共通理解が感じられた。演奏後は観客も加わり、協演者を超えて毎回批評の輪が広がる。同曲へのそれぞれ異なるアプローチに際して、時に学際的な議論が起こり、音楽的探究の広がる最良の機会となってきた。

- 国際人として次社会を担う人材を創る

学術発展とも関連するが、日韓及び日中韓それぞれの交流で、学生教育におけるポイントとなるのは、継続と専門性の2点であると考えられる。

ひとつを継続とした根拠は、研究領域で考えられる国際学術交流も、学生にとっては、4年～7年という在学期間における時間認識である。経験は受け継がれ、一方で社会へと持ちだされる。この視点には、「継続」がいかに重要かが、刻みこまれていると思う。多いときには年に2回以上の国際交流経験をする音楽専攻の学生は、日韓および日中韓の来日学生のスケジュールは、ほぼ自分たちでコーディネートし、その上で音楽交流、専門的な意見交換と成果発表を行う。これが日韓の場合20年間、日中韓の場合は5年間継続された結果、まだまだ慣れない1年生を除いて、ノウハウは順に受け継がれ、国際交流に物怖じする学生は、学生同士の共通認識としてあまり見当たらない。国際大学セミナー実施アンケートによると、セミナー全体における日韓学生の満足度は、「大変満足した」が43%、「満足した」が49%という好反応を示している。

専門性をポイントとするのは、音楽交流や学術交流をする際、専門性はその「資格」になるからだ。国際交流とは、大学というコミュニティや、地域、日本という枠組みから外れて、自分の存在を見つめる機会である。国際交流における能力とは、実際の或いは経験的な見方からすると、正負両面の意味で、各自のアイデンティティを内包している。どれだけ交流を深めても、互いに切磋琢磨し同じ楽曲・サウンドを創り上げて、属性がなくなることは無いだろう。それを超える理解があり、共感があり、支えられている関係性をより長期・発展的に望むならば、専門性に焦点を当て、ベストをつくすことが、タイムリミットを持つ学生にとって、国際交流が大きく貢献することだと考える。

また、これらの国際交流には、大学留学生センターと連携し、毎回多数の留学生が通

訳として加わっている。加えて、過去の日韓音楽交流から発展して、長崎大学への留学経験をもつ者が、交流大学の連絡窓口になっているケースがある。これは、互いの国際交流がスパイラルに成長していることを示す。今後、音楽と併せて、言語など様々な能力及び専門性を活かした交流の輪が広がることは、可能であり、望ましいだろう。

- 地域貢献

しかし、ここで最も強調されるべきなのは、音楽分野の強みとしての、地域市民とのかかわりである。両交流における演奏会は、一般公開を前提としてきた。また、セミナーやシンポジウムは、卒業生や県下で音楽活動に携わる人々に広く周知し、大学におけるこうした活動の成果を同時に発信し、地域と共に盛り上げることを目指してきた。こうしたことは、「大学のアカデミアが地域へ果たす役割」という視点から、長崎大学からも方針が出されている点に合致するものと考えられる。また、芸術大学をもたない九州地方において、教育学部系の音楽分野の果たす専門的役割は、文化の磁場として或いは社会教育の分野において、本来非常に意識されるべきニーズが存在していると推測できる。学校義務教育が子どもたちの文化の素地を創るという点で重要であるが、現代社会の成熟を考えることも同様だ。これは複合的に結びついた社会経済的螺旋構造の一部から観たひとつの目安に過ぎないが、昨今、社会における文化活動への参加に影響を与える最大の社会的要因としては、教育水準が指摘されてきている。このことは、子どもから大人まで、幅広く長期的な文化的サポートの必要性や有効性、可能性を示唆しているだろう。社会の文化的な質の一端には、学校教育が始まる以前から、多くの子どもたちが教養として習う音楽教室のレスナーの方々や、幼稚園や学校、病院などありとあらゆる会場で出張公演をする音楽家（ここには音楽専攻も時に含まれる）の存在がある。そうした価値を創り出し、多くの人に伝える機会をもつ人々が、新たな刺激を受け、また疑問や気づきを投げかける場として、こうした専門的な国際交流におけるセミナーや演奏会が、地域との開かれた関係を結び、強固で柔軟なネットワークに育っていくことは、今後一層重要になると認識している。

国際学生交流フォーラムにおいて、毎回、広々としたスペースの3面をガラスでめぐらせ、高さ12メートルの吹抜け空間をもった長崎県美術館エントランスロビーは、地域における「偶然性の出会い」の実験会場になっている。平成21年2月22日に開催した第4回目フォーラムについて、美術館が実施したアンケート結果を観ると、回答者の45.8%が、美術館に来て国際学生交流フォーラムを知り、足を止めた人々ということが分かる。また年齢層は10歳代以下から70歳以上まで、幅広い観客構成となっている。感想欄には「東アジア圏の芸術による国際交流も今回で4度目とのこと。地道な積み重ねによる相互理解の活動、すばらしいです。」「思いがけず生コンサートが聴けてよかったです。国際交流とあって、いろんな楽器や言葉、間近で演奏しているところを見られ勉強になりました。言葉で通じなくても、音楽で共感できすばらしいと思います。」「各国の特色ある音楽に接し大変感動した。ぜひ次回も聴きにきたい。」など多くのコメントが寄せられた。誰にも強制されない、市民とともにある国際交流の貴重な舞台となっている。

4. 課題

音楽専攻の国際交流における今後の課題については、以下の項目が挙げられる。まず、喫緊の課題は、国際学生交流フォーラムの財政基盤確保である。2011年以降、上海師範大学での移動開催への期待もあるが、資金の見通しが立っていない。これまでのところ、固定財源からの開催費用調達とはなっておらず、学内の記念事業費と裁量経費、及び学外の助成（草の根国際交流基金）で各年開催されてきた。元々教育学部の創立130周年記念事業として立ち上がったものであるため、交流の成長と費用準備が一致していなかったこと、また参加大学の負担費用の線引きが曖昧であったこともあり、再度調整が必要になると考えられる。しかし、特に日中韓での本フォーラムは、今後教員のためのプロジェクトであるアジア圏での音楽交流「音楽のシルクロード」事業とも関係

しながら、多国間に成長していく可能性を強調できる。

また、これまで開催費用適用外のレセプションや歓迎にあたっての経費は、学部事務の方々の理解により、可能な範囲での支援をいただくことができた。しかし、多くは音楽専攻側の教員及び学生の自己負担経費でまかなわれてきたというのも実情である。2010年度国際学生交流フォーラムの来日学生（3名）経費は、食費は大学経費から援助を得、残り記念品や交通費などを音楽専攻学生のプールする学生会費から拠出したが、2泊3日の行程で概算18,000円程度となっている。歓迎・もてなしの大切さを学ぶ機会でもあり、学生自身、移動や食事等の自己経費負担については合理との認識があるが、その他の諸費用については、昨今の経済状況とも併せて、柔軟な資金の調達が課題となっている。

事業枠組みの課題としては、これら国際交流の単位化が挙げられる。これまで学部等からは、音楽専攻による国際交流が、実際的には音楽分野に限定された有志的な参加形態をとっていた点が指摘されてきた。これまでの一定の成果をもってこうした状況から脱却し、交流の専門性は保ちながら、大学の教育事業の一環として、より多くの学生や教員が関わり、発展・成果共有するシステムとして、国際交流の単位化を次の課題とする。またこれにより、単位互換を基本精神とする学術交流協定の実質化が進むことになり、音楽交流の発展がアジア圏における学生留学等の活性化に直結してくるだろう。また今後、長崎大学のアジア圏に重点を置いた国際化の姿勢を視野に入れるならば、前述の適用外経費の負担点についても、国際交流経費として、より有機的な事業遂行が可能となる資金確保等に対し、理解を求めたい。

内容的な課題としては、講義やセミナーの充実化等が挙げられるが、より一層の深化の前提としては、学生教育面での語学サポートが必須と見られる。これまで20年間、韓国との交流がなされてきているが、韓国語習得には組織的な動きをみななかった。西洋芸術音楽を学ぶ際の必要言語が主にヨーロッパ言語であり、国際交流における語学学習面までは意識されない向きもあるだろう。しかし今後、日韓交流においては韓国語、日中韓など多国籍フォーラムには英語の特修クラス等のサポート対応について、文化・学術交流の発展と高度化の視点から、音楽分野でも今以上に認識される必要があるだろう。またこのことは、国際交流の単位化などとも関連して、重要度を増すことが予見される。

5. 展望

これまで、音楽分野による国際交流については、1つ目に学術、2つ目に教育、3つ目に地域へと波及する役割を述べてきた。1と2の連結が強いことも、特に学生の立場からは望まれる部分である。しかし同時に、音楽による国際交流は、地域に文化的なダイナミズムを生み出すことができる。東アジアにはこれまで長きにわたる文化交流があり、音楽の伝統もある。長崎は、日本で初めて西洋音楽が伝来した地であると同時に、長崎明清楽など、アジアの情緒あふれる芸術が、今なお民間の力によって保存・継承されることの盛んな地域でもある。こうした地域の特徴や強みを活かしながら、地域に根差した音楽分野での国際交流のグラスルーツな試みは、幅広い年齢層や社会に属する市民の意識に直接働きかけ、影響力をもつ。交流大学との音楽的深化と発展、或いは単位化等による交流協定の実質化、また国際的な知的情報発信拠点形成と共に、今後、音楽分野はその持ち前の機動力を発揮しながら、市民社会に柔軟な相互理解の機会を提案できる。

長崎大学ロゴにある帆船が、大きな帆を一杯に張って、長崎港から大海原に乗り出していく。そんな大学の在り方に貢献できる国際音楽交流を、継続の視点から提案したい。

参考・引用文献等一覧

- ・ 芸術の売り方 J.S.バーンスタイン 訳・山本章子 英治出版 2007年
- ・ Performing Arts Research Coalition,
 “The value of the Arts in Ten Communities” 2003
- ・ 国際大学交流セミナー：開催チラシ及びパンフレット 2010年
- ・ 国際学生交流フォーラム：開催チラシ及びパンフレット、スピーチメモ
 2006年、2007年、2008年、2009年、2010年
- ・ 長崎新聞 長崎大学PR頁（12面） 2011年1月3日
- ・ 国立大学法人長崎大学ホームページ <http://www.nagasaki-u.ac.jp>